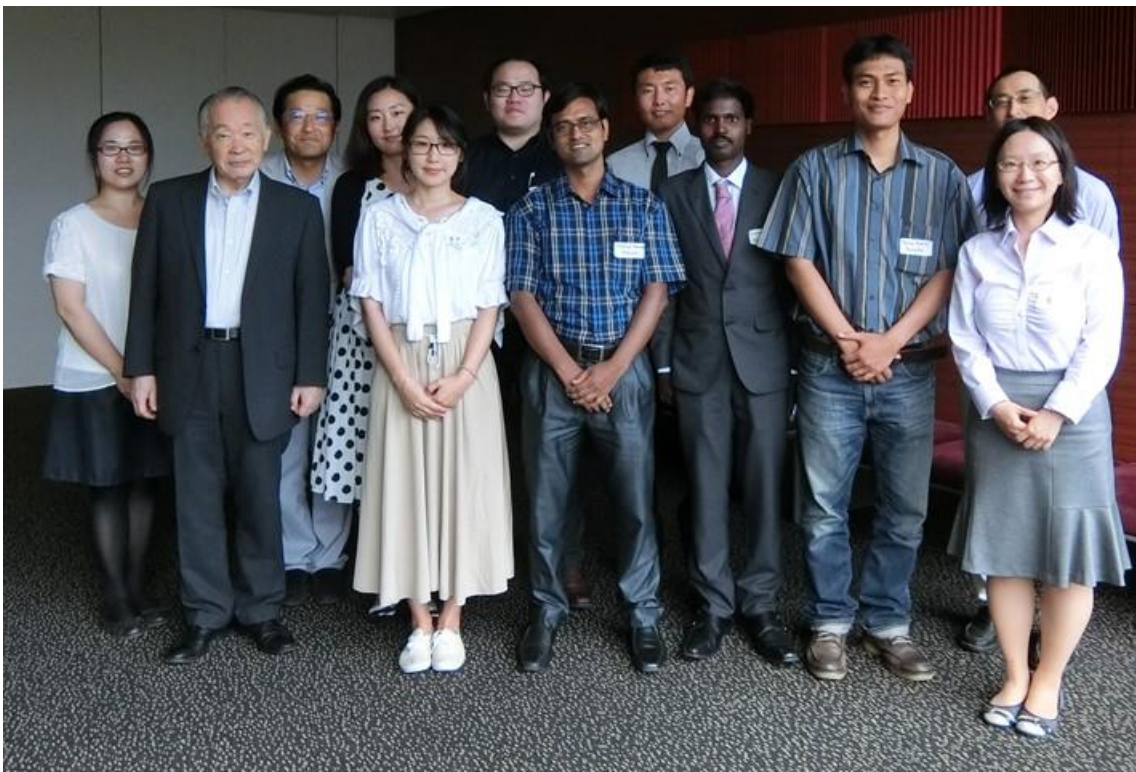


2016年度 第32回

在日アジア人留学生への研究補助

受給生紹介



東京・三田の慶應義塾大学にて

RASAーアジアの農村と連帯する会
Rural Asia Solidarity Association

氏名 申 舌禾 (シン ソルフア)
出身 韓国
大学 中央大学
文学研究科 国文学・修士2年



(留学目的)

私は大学校で日本語、日本の文化、日本の文学、歴史、政治等、日本の全般的なことを学びましたが、日本の様々な勉強をするうちに、日本の文学に興味が強まり、いろいろな日本の文学に触れるなかで、私は日本特有な私小説に興味を持つようになりました。フィクションにではなく、自分の私的な話をぶつぶつと吐き出す饒舌体に関心が生じました。その中でも太宰治の「人間は拳を固く握りながら笑えるものではない」という素直に生きていられない人間の様子を表す『人間失格』の一文章に惹かれ、留学を決心しました。私の目標は日本の文学を正しく理解していろいろな文学を韓国読者に知らせることです。韓国では日本の文学が以前よりは沢山読まれているが、それは現代文学や有名な文学の一部に限っているとだけでも良いです。そして、まだ日本の文学が苦手な人が多い理由は日本の文化や文学の深さをきちんと感じるができないからだと思います。私は日本の文化や文学を正確に理解することでいろいろな日本の文学を韓国に紹介し、太宰治の作品だけでなく、日本の私小説を理解するのに一助したいと思います。

(研究課題)

私は太宰治の滑稽の作品の中で『お伽草紙』に見られる太宰治の文学観や世界観について三つの問題を軸にして考察したいです。まず、太宰の生涯は日本の戦争の時代とともにしました。特に中期の作品は第二次世界大戦の時期であり、このような戦争期の日本文学界は、国策文学に熱意が高まり、多くの作家は国策文学に務めていました。しかし、それに反して太宰は自分なりの作品を書き続けました。時代の流れと違う立場を取った太宰の世界観や文学観について検討して行きたいです。また、『お伽草紙』は「「個」から「日本回帰」へ」という当時の流れによって、「日本回帰」の時代的な風潮と無縁ではないという意見と、その時代の風潮とは全く逆方向を目指していたという見方で分けられます。しかし、太宰治はある思想を特定したのではなく、ある思想に偏って行く当時の流れに警戒を示したのではないかと思われれます。『お伽草紙』に書かれた太宰治の世界観には、当時のある思想や価値観に偏る世の中を相対化するための作業ではなかったのか。それが私の研究の中心仮説です。最後に『お伽草紙』を書いていた頃の太宰は空襲のため疎開中でした。その深刻な状況の中で、純文学ではなく、ユーモアが溢れる通俗小説を書いていたことに注目したいです。

氏名 許 元寧 (ホ ウォニョン)
出身 韓国
大学 慶應義塾大学
法学研究科後期博士課程 3年



(留学目的)

申請者は日本文化を通じて日本という国に興味を持ち始めたが、大学院進学と留学に最も大きな影響を与えたのは、学部時代の国際教養大学への1年間の留学経験である。その期間、申請者は中国・台湾・モンゴル・シンガポールなどアジア各国から来た留学生と共に生活し、日本のみならず他のアジア諸国に興味を持つようになった。また、授業等で政治懸案をめぐり彼らと議論する過程で、アジアにおける国際関係をより深く勉強したいと思った。帰国後、進学を決心し、論文のテーマを日韓関係でなく日中関係にしたのも、その影響である。修士論文執筆の過程で、東アジアにおける海洋問題を日本の観点で捉えた研究が必要だと考え、教育・研究両面で日本での進学が望ましいと判断し、留学を志した。現在は博士号取得を目指して研究を進めている。

(研究課題)

申請者の研究課題は、新たな国際海洋レジームが形成・定着される一方で国際環境が様々な変遷を経てきた1970年代以降から脱冷戦期までの時期を対象に、海洋に対する認識と制度を変えていった日本の対応を解明することである。とりわけ海洋をめぐる日中間の対立構造は、それが国際海洋レジームの変容や中国の台頭等の国際環境の変化と密接な関連を持ちながら形成されてきたにもかかわらず、従来の研究では両国の間で突発するイベントとして扱われる傾向が強かった。以上を踏まえて、海洋をめぐる国際環境の変化とそれに対する日本の対応を、その要因と共に分析することを目的とする。今まで衝突と対立の種として取り扱われた日中間の海洋紛争を長いタイムスパンで捉えることで、同問題に新たな視座を提供することが期待される。

氏名 宝音朝格拉 (Bao yin chao ge la)
出身 中国 (内モンゴル)
大学 筑波大学
生命環境科学研究科 博士後期課程 3年



(留学目的)

来日した当初は中学校や高校の社会科教育をより深く勉強し、新たな指導方法や研究方法を習得し、帰国後それを生かして内モンゴルのモンゴル族高校で地理教育の仕事に就き、生徒たちに尊敬されるような先生になるという夢を持っていました。しかし、乾燥・半乾燥地域である内モンゴル自治区の農地の展開や気候変動などによる、黄砂の発生や沙漠化という環境の悪化が日々増す一方である。私は帰国するたびに故郷の環境悪化を目にし、心を痛めていた。そして、修士修了後、どうしても故郷の環境保護に力になれるような人になりたいと思い専門を水文科学に変更しました。専門を水文科学にしたの乾燥・半乾燥地域である内モンゴル自治区では現在地下水による灌漑農業が多く展開されておりますが、水文学的な研究などがあまりにも行われてなく、ほんとうに地下水灌漑農業していいかどうか不明だからです。

(研究課題)

現在は「霞ヶ浦沿岸水田の霞ヶ浦水収支に与える影響」というテーマで研究を行っております。霞ヶ浦における先行研究が多く行われているが、沿岸水田の分布、水田の種類、灌漑方式、用排水量など研究が行われてなく、従って霞ヶ浦の水収支も精密度が欠ける部分がある。本研究では上記の課題を解決するという目的に向けて進めております。今回の研究を通じて、基礎知識から研究方法までは習得できれば、修了後は内モンゴル自治区へ帰り、故郷の大学で水文研究をできるようになればと思っております。

氏名 Mahtab Mohammad Hossain
出身 バングラデシュ
大学 政策研究大学院大学(GRIPS)
Disaster Management Programme



(留学目的: Aims to come to study in Japan)

Bangladesh is a developing country which is frequently affected by flood disasters. I am a Civil Engineer and working in Bangladesh Water Development Board (BWDB); responsible for water related disaster management. Flood is a disaster by which Bangladesh is affected almost every year thus a lot of economic damages occur. On the other hand; Japan is a developed country and have a lot of flood damages experienced in the past few decades. After that Japan implemented a lot of flood mitigation and adaptation programmes. So, Japan has field experiences to deal with flood disaster. Therefore, Ph. D. in Japan on flood management is a great opportunity for me to get practical experiences how to deal with flood disasters. So, I am in Japan for Ph. D. research on flood disaster management. After achieving my Ph. D., I will back to Bangladesh and start to work again in BWDB and apply my acquired research knowledge for flood management.

(研究課題: Topics to study at present)

Ph. D. in disaster management. Flood is one of the disasters that Bangladesh suffers almost every year and maximum number of people suffers from flood hazard. Therefore, flood problem identification and vulnerability assessment is very important to manage the flood hazard. This research will mainly focus on the crop damages reduction methodology due to flood. My research will try to find the way 'how to reduce the crop damages resulted by flood in Bangladesh'. Finally, the methodology will be published through Web-GIS in Bangladesh such that local people can utilize this information for reducing flood damages.

氏名 Paulus Rudolf Yuniarto
出身 インドネシア
大学 首都大学東京
人類学部 博士課程



(留学目的: Aims to come to study in Japan)

Japan is a great place for study, to research, and making network. Because Japan has high educational standards and is a melting pot where study/research together a lot of people who come from variety of nationalities. I think that spending a time with people who have different backgrounds; education, culture, personality and nationalities is important as much as research for Doctoral Course. It will help me to see things from new perspectives, and appreciate the differences between cultures and experience, while also seeing the deep similarities between people. That's my reason to come to Japan, I want to pursue doctoral degree and to become a professional in my studies. After graduating from study, I will continue to work as a researcher at my office in Indonesian Institute of Sciences (national research institution). Besides, while study in Japan I would like to learn much new things, specifically of those concerning on migration and community development studies. So thus after graduation, hopefully I can develop knowledge and expertise in the area and would embark on further research, collaborated with Professors, colleagues and experts from Japan universities or research institutes.

(研究課題: Topics to study at present)

Title: "Bridging People, Seizing the Future" Indonesian Migrant Entrepreneurs in Taiwan and Return Migrant Entrepreneurship in Malang, East Java

Objective: Most of migrant entering entrepreneurship world or become self-employment because they don't have much work choice, both when stay abroad or after return. Since arrived at destination countries and home, the biggest question always appear in their thought, how to get survive. Doing business is top the answer. But then they realize making entrepreneurship at abroad and home not as easy as turn back a hand. There's so many problems face from basic, such as how to get capital for business until how to increase the firm and develop business network. This study intends to describe and analyze entrepreneurial expression (survival) of Indonesian migrant in destination country (Taiwan) and return migrant entrepreneurs at home village (Malang-East Java). From internal-external dynamics of migrant entrepreneurship activities intend to know what survival strategies facing living circumstances and roles of entrepreneur in their society. In specific, by studying Indonesian migrant entrepreneurship in destination and at home country would like to gain; (1) an understanding on migrant economic strategies pattern and stories related to living difficulties - how to gain economic establishment, how they get in relation with plight migrant worker condition and process it in business orientation, and how they found valuable experience at living migration, disseminate to other, and develop solidarity formation among Indonesian migrant in Taiwan, (2) and to understand migrant entrepreneurs practice their knowledge and self-consciousness in develop sustainability living (economically). In this objective regards, my study on migrant and return migrant entrepreneurship will go not only discuss individual migrant economic survival, but also how migrants interpret their social environment or migration process into socio-economic relation through self-employment or entrepreneurship activities.

氏名 李 雪
出身 中国
大学 早稲田大学
教育学研究科博士後期課程 4 年



(留学目的)

修士課程に日本語教育を専攻していたが、後、中国の大学における日本語教育現場で教育実践を一年間行った。日本語学習者から日本語教師への身分変更とともに、自分の教育観も次第に形成されつつあった。なぜ日本語を教えるのか、日本語教育がどのような方向へ発展すべきかについて問いかけている。天津では戦前期、日本租界が設けられ、日本語教育の伝統が長い。したがって、歴史から学ぶ必要があることに気づき、日中両国の文化教育交流史について研究しようと考え、日本留学を決心した。

(研究課題)

近年、日中両国間の立場の相違により、歴史認識に関してはしばしば問題が生じている。戦前・戦中において、日本人が中国で行った教育をどう評価するかも、歴史認識に関わる一つの大きなテーマである。応募者は現在、天津市の旧日本租界を対象として歴史資料の発掘や歴史体験者の聞き取りを通じて、戦前の日本人の教育活動の展開、そしてそれが日中文化交流史にもたらした影響を実証的に解明しようとしている。それによって、20世紀前半の日中教育関係史における交流と摩擦の具体像を明らかにし、今後の両国の歴史認識に新たな示唆を与えることができると考えているためである。博士論文では、1900年の義和団運動から1945年の日本終戦に至るまでの年代に焦点を当て、中国人を対象とする初等・中等教育機関、日本語学校と、日本人在外子女を対象とする初等・中等教育機関、社会教育施設の双方を視野に入れた資料収集と整理分析を行い、上述の課題に迫ろうとしている。

氏名 任 貞美 (いむ じょんみ)
出身 韓国
大学 同志社大学
社会学研究科 博士課程 4年



(留学目的)

質の高い高齢者福祉の政策や実践について勉強し、東洋ならではのユニークな高齢者福祉サービスシステムを構築することを目指して、来日した。私は、社会正義の実現と人権向上を目指している社会福祉学の研究者として、現実を明らかにし、人権侵害などの課題をエビデンスに基づいて指摘できる者として成長したい。

国内外でのコミュニケーション能力(日本語、韓国語、英語)や国際的な視点、日本・韓国での現場実務経験は、理論と現場の懸け橋となる研究を行うことが可能になると思う。当事者・実践家・研究者・社会に貢献できるような研究者になることを目指して、これからも努力を惜しまず、精進していきたく思う。

(研究課題)

研究テーマは、高齢者虐待の定義を再構築し、実践現場に有用な施設内の高齢者虐待の予防モデルを構築することである。現行の高齢者虐待防止法では位置付けることのできない、虐待に準ずる人権侵害行為や不適切な介護行為を準虐待という新たな概念導入を通して、明らかにする。これらをもとに虐待の実態を的確に反映できる虐待予防策を提案することを目指している。そのため、現在、全国の介護職員(6000人)を対象に、高齢者虐待の予防に有効な効果的な援助要素を析出する量的・質的調査を行っている。この研究は、特に、これまで既存の研究で捉えられなかった準虐待という新たな視点を取り入れ、段階的に発生する虐待発生の経路やメカニズムを解明するオリジナリティを持った研究である。児童虐待等他の分野においても大いに参考できる研究と思われる。

氏名 Balasubramaniyam Thananjeyan
(スリランカからインドに逃れた難民であった)
出身 スリランカ
大学 宮崎大学
医学部



(留学目的: Aims to come to study in Japan)

My life ambition is to complete the Master program and would like to continue my Ph. D. during my master degree in BIOTECHNOLOGY. I took genetic engineering as elective subject. I want to do more research in thi subject but limited resources and facilities of the campus the constraint. But Japan is one of the most technologically advanced countries and Japan has an excellent academic environment that allows students to be innovative, creative and think independently. So I studied I chose the University of Miyazaki because I could find the most suitable and experienced teacher for my research. After gaining my degree I am planning to go back to Sri Lanka to be apply my knowlege in genetic research and hopefully improve inheritance disease treatment model system in Sri Lanka.

(研究課題: Topics to study at present)

I have to enrolle my Ph. D. (medecine and veterinary science) in the University of Miyazaki. My research field is “stabilization of Z -DNA and characterization, function analysis” although numerous studies have been made of Z-form DNA; its chemical properties are not well understood, presumably because of the difficulty in obtaining sable Z-form oligonucleotides under physiological salt conditions. We have demonstrated previously that the incorporation of a methyl group at the guanine various position (m^8G) stabilizes the Z form of oligonucleotides.

My research contains numerous application in following department drug design, therapeutics and human medicine ex: The tenacity of the Z-DNA binding domain to bind Z-DNA is essential for the pathogenicity of many viruses in their hosts. Therefore, a ligand that disrupts the interaction between the Z-DNA binding domains and Z-DNA may inhibit biological functions of pathogenic viruses and lead to the development of a new class of antiviral agents. We can easily diagnosis for in viral infection related disease and necessary for discovering novel tool for treating infected patient so this study definitely give as good impact of society.